

「純粹無垢で恥知らず」

先日の元旦礼拝が終わった後、私と家族は、私の実家に行ってきました。高速道路を使って片道 4 時間くらい、岡山県は勝央町というところですよ。北側に見える中国山地は、雪を被っておりまして、気温だけを見ても、ここ敦賀よりも寒かったですね。平地は、あまり雪は降らないんですけどね。バケツの水に氷が張るくらいには冷えていました。

これはあくまで一般論ですが、男性は実家に帰ると、より気が緩むと言いますか、童心に帰ると言いますか。私が、隣の牧師館で、いつも自分の子どもに言い聞かせていることを、実家に帰ると、私自身が何も出来ていないという。テレビを見ている時、私の母から「明日の朝ご飯何が良い？」って聞かれて、「んー・・・」としか言わないとかね。そんなん、私が自分の子どもにされたら、「ちょっと、今のは何だ」と言いたくなる案件ですよ。しかも、明朝の朝ご飯をちゃんと伝えることが出来たかと思えば、非常に油断して、遅くまで深酒して、次の日、お昼まで寝ているとかね。元旦礼拝の説教で触れた牧師同士の忘年会の時は、朝 5 時まで飲んでも朝食バイキングは食べられたのに。甘えなんでしょうね、きっと。この歳になっても、実家や母に甘える自分に気付いて、少々恥じ入る気持ちになった、そんなお正月でございました。

「恥の多い生涯を送ってきました」とは、太宰治の代表作である『人間失格』の書き出しの文章です。『人間失格』というタイトル、そして、「恥の多い生涯を送ってきました」という書き出しを見て、私たちは別に何の違和感もないかと思えます。「そうか、恥の多い生涯を送ってきたから、この小説の主人公は、あるいは、太宰治自身は、自分のことを人間失格だと思っているんだろうな」と、そう推察するかと思えます。この小説の詳しい解説はしませんが、私たちは漠然と「恥の多い

生涯」＝「人間失格」だという認識を共有しているんじゃないか、ということは言えるかと思いません。

「いやあ、おまえって恥知らずやなあ」と言われて、この言葉が褒め言葉であると受け止められる人って、多分いないと思います。「恥知らず」とは、相手を貶める言葉であり、非難する時に使う言葉です。ということは、つまり、「恥知らず」の反対である「恥を知る」ことが、人としての大切な品格であるということだと言えます。だから、話をちょっと戻しますが、『人間失格』の主人公や、もしくは太宰治自身は、自分が「恥の多い生涯を送ってきた」ということを知って、自覚できている点で、「恥知らず」ではなく、ちゃんと「恥を知る」品格を備えた人物である、という解釈もできますね。

「自分は恥ずかしいことしている」あるいは「恥ずかしいことをしていた」と知っている人は、「恥知らず」ではないから、それは、素晴らしいことであると私は思います。一番、恥ずかしいのは、自分の行いについて無知であること、その責任の取り方を知らないことです。今、インターネット上の言論空間で、本当に無責任な言葉が飛び交い、炎上し、人を傷付けています。あまり批判的なことを言いたくはないですが、それこそ「恥知らず」の所業であると思います。人は間違え、過ちを犯しますが、そこに「恥じらい」を感じて、反省し、改善を施せるかどうか重要だと言えます。

と言うところまで、共感頂けるなら、今日の聖書箇所について、どのような感想を持たれるでしょうか。ここは、蛇に誘惑され、唆されて、神様によって禁じられた木の実を食べてしまった男女のことが書かれています。男性はアダムと言ひ、女性は、この少し後に、イブと名付けられました。伝統的に、この聖書箇所は、人類全体に最も原初的な罪、つまり、原罪が入り込んだ箇所として読まれてきました。人は生まれながらに罪深い存在である、と言われる、その根拠が、最初の男女が、

神様の言いつけを破り、禁断の木の実を食べたからだとされてきたんですね。今でも、この考え方は、キリスト教において支配的であり、この原罪を清める存在としての、新しいアダム、主イエス・キリストがお生まれになったという神学理解もあります。

しかし、今日の、この話、よくよく読んでみると、色々と不自然な点が見られます。例えば、神様は女性イブに対して「食べてはいけない、触れてはいけない、死んではいけないから」と警告したとされていますが、実際に食べてみて、どうなかったと言え、死んではいません。「嘘も方便」という諺がありますが、神様は嘘をついて、最初の男女にもものを教えておられた、ということなのでしょう。もっとも、聖書における「死」の理解は、多岐に渡るもので、ここでの「死」の警告についても、さらに踏み込んだ解釈は出来るでしょう。今日は、ちょっと長くなるので、省略させていただきます。さて、ともかく神様による「死」の警告と、その結果の不整合がある一方で、蛇の誘惑と言いつつ、蛇は女性イブに真実を語っている点も不思議です。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」と。確かに、死ぬことはない、目が開けたことが、結果として分かります。そして、神様が全知全能であることを認める限り、神様に、この最初の男女の行動が想定外だったということも、ちょっと理解しがたい。もし、神様がアダムとイブが、このような行動に移ることを予見できなかったとするなら、それは、神様は全知全能ではない、ということをお認めすることになってしまいます。さあ、どうしたものか。

極めつけは、最後、7節のところ。「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、2人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」というところです。これは、つまり、自分たちが裸であることに気付いて、「恥ずかしさ」を憶えた、ということです。「恥を知った」ということなんですね。ここでアダムとイブは、「恥知らず」ではなくなったのだと。先ほども言ったように、この箇所は、伝統的に人類に原初的な罪が入り込んだ、原罪の物語として読まれることがあ

ります。しかし、果たして、恥を知るということを伝える、この物語は悪い物語なのでしょうか。私たちの理想像は、恥を知らずして裸で過ごすことなのでしょうか。

さらに言えば、「いちじくの葉で腰を覆う」という表現は、お互いの生殖器を隠すという意味も含まれています。そして、そこから発展した解釈として、アダムとイブは、善悪の木の実を食べることで、生殖、妊娠、出産の知識を得たのだとも言われています。だとすれば、それは、神様が、創世記1章28節で宣言されている「神は彼らを祝福して言われた。産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」という御言葉に沿うものであり、決して悪いことではありません。そういう神学的発想に立つなら、アダムとイブがこの実を食べなければ、私たちは生まれることもなく、また、教会学校や幼稚園の子ども達を温かく見守ることもできなかつた、ということになります。

古来、キリスト教の教会は、アダムとイブの、この木の実を食べた物語を、失敗と罪の物語として黒く染め上げて、人の罪を自覚させる常套手段として用いてきました。しかし、ちゃんと読んでみると、そこには罪の理解に対して疑問を挟む余地があり、また、「恥知らず」から成長できたんじゃないかという福音さえ見ることができます。

もし、私たちが反省しないといけない程に罪深いとすれば、それは善悪の木の実うんぬんの話ではなくて、私たち自身の失敗と過ちの故だと言えます。そして、私たちキリスト者は、ちょっとだけ自身の失敗と過ちを知る感度が良いんだと思います。「知って犯した過ちも、知らずに犯した過ちも、どうか赦してください」と祈ることができる。自分が完璧じゃないことを知って、気付かないところで誰を傷付け、悲しましていると弁えて、「だから、神様、ごめんなさい」って言うことができる。・・・私たちは、よくよく自らの「恥」を知っています。私たちは「純粹無垢な恥知らず」ではなく、良くも悪くも、大人になり、善悪を知り、人の気持ちを感じ取り、寄り添うことができます。純真無垢であることを手放した代わりに、酸いも甘いも噛み分けた立場から柔和に振る

舞い、垢にも泥にも煤にもまみれた手をちょっとでも綺麗にしながら、隣人のために、社会のために奉仕しようとしている。今更、無垢にも無辜にもなれないけれど、自らの犯した「恥」を知り、それを信仰によって覆ってもらって、乗り越えさせてもらって、なお神様の御用のために歩んでいる。それって、とてもすごいことだと思います。たとえ、大失敗の先で自分のことを『人間失格』のように思えたとしても、それを自覚できているだけ、私たちは「恥知らず」ではなく、「恥を知る」神様の大切な子どもであることを心に留めていたいと思います。

新たに始まった 2025 年。多分、恥じ入ることも少々、いや多々あるかと思いますが、そこは神様に助けてもらって、イエス様に慰めてもらって、意気揚々と歩んで参りたいと思います。皆様の上に、私たちの罪を覆ってくださる神様の祝福が豊かにありますように。最後にお祈りを致します。

神様。

今日は、2025 年最初の聖日礼拝を、敬愛する方々と共にお捧げしています。過ぐる 1 年間に頂いた、あなたからの多くの恵みと赦しと慰めに感謝しつつ、今年もあなたを信頼し、全てを良い塩梅に整えてくださることを信じて、祈りつつ、励んで参りたいと思います。自らの恥を知りつつ、なお、腐らず、へたり込まず、主の道を歩むことを止めない私たちのことを、どうか力強く導き、大きな祝福で満たしてください。そして、他者の恥を責めたり、笑ったりするのではなく、イエス様がしてくださったように、寄り添い、励ますことができますように。私たちの信仰と隣人愛を強めてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

1月の誕生日の方を憶えて

聖書：詩編 71 編 17～19 節

神よ、わたしの若いときから／あなた御自身が常に教えてくださるので／今に至るまでわたしは  
／驚くべき御業を語り伝えて来ました。わたしが老いて白髪になっても／神よ、どうか捨て去らな  
いでください。御腕の業を、力強い御業を／来るべき世代に語り伝えさせてください。神よ、恵み  
の御業は高い天に広がっています。あなたはすぐれた御業を行われました。神よ、誰があなたに並  
びえましょう。あなたは多くの災いと苦しみを／わたしに思い知らせられましたが／再び命を得さ  
せてくださるでしょう。地の深い淵から／再び引き上げてくださるでしょう。ひるがえって、わた  
しを力づけ／すぐれて大いなるものとしてくださるでしょう。

羽根まり子                    はね まりこ    さん                    1月3日生まれ

前 道幸                        まえ みちゆき    さん                    1月19日生まれ

増田正樹                        ますだ まさき    さん                    1月27日生まれ

神様。私たちは、新しい年の幕開けを祝うこの1月にあなたによって尊い命を与えられ、生まれ  
て来られた誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。今、ここにお立ちになっている方々の人  
生を振り返れば、山あり谷ありの道を歩んで来られただろうと思います。その深みにある時も、ま  
た、その頂きにある時も、いつもあなたが隣にいて、支え導いてくださったのだと信じます。それ  
ぞれの誕生の日から始まる新しい一巡りも、どうかあなたが傍にいて、その喜怒哀楽に寄り添い、  
時に応じた相応しい御業を示してください。あなたに連なる人生に、大きな喜びと幸いを、どうか  
お与えください。あなたと共にいて良かったと思える人生を、どうかお示してください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。